

東海の古代

第230号 2019年10月

会長 : 竹内 強

編集 : 石田泉城 投稿先アドレス : furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp

HP : <http://furutashigakutokai.g2.xrea.com/index.htm>

「百嶋神社考古学」からみる古代の伊豫国（第一章）

安城市 山田 裕

はじめに

古代の伊豫国は瀬戸内海の要衝に位置し、文化・政治・交通路として重要な拠点であった。この重要な拠点を掌握した政治集団を畿内王権とするのが学会の通説であるが、その時期は意外にも明らかではない。

愛媛県内の神社には多くの神々が祀られ、地域によっては明らかな特徴を示している。

これらの神々が、いつ何処からやって来たのかさえ明らかではない。

『古事記一島生み神話』は古代の伊予国を「愛比売」と記している。愛媛県はこの「愛比売」という女神を由来としているものの、伊豫国との関係も不明のままである。

本論は、以上の疑問に対して「神社考古学」に60年を捧げた故百嶋由一郎氏が作成された「神々の系図—平成12年考」（以下、「神々の系図」と略す）から、新たな視点で古代の伊豫国を考察する。

第一章 古代の伊豫国をいどる神々

古代の伊豫国で祀られた最も古い神々に関する史料が現存している。それが、大山祇神社に関わる四史料で、面足尊と倭根尊を記録している。この両神について、それぞれの史料から検証を進めたい。

1. 『三島宮御鎮座本縁並寶基傳後世記録（以下、『御鎮座本縁』と略す）』

「七代の天皇日本根子彦太瓊天皇（孝靈天皇）、日本国黒田廬戸宮にて天照大神相與に大山積皇大神を祀り給ふ。是れ三島神徳の始めなりと云々。伝に曰く、此の御代、天下穏やかならず、順はざる民多く叛く。茲に因りて、天皇、大己貴神に盟い、天下平らかに国民順はしめんことを祈り給ふ。大己貴神夢に告げて曰く、君、天下平らかに国民順はんことを冀ひ給はば、先ず面足・倭根尊此の二柱の神を祭るべし。是則ち大山積大神なり、と申し教へ給ふ。これに依りて天照大神と相與に祭り給ふと云々。」

（『大山祇神社史料（縁起・由緒篇）』、國學院大學日本文化研究所編集、平成十二年）

伝承が錯綜し、不明な点はあるものの、要旨は、以下の三点である。

- (1) 黒田廬戸宮が何処にあったのかは不明だが、孝霊天皇は天照大神と大山積皇大神を祭祀していた。三島宮（大山祇神社）も同様に両神を祭祀していた。
- (2) 孝霊天皇が国内の乱れに苦慮していた際、大己貴神に祈ったところ、同神が夢枕に顕れ、面足・倭根尊を祀るべしと託宣した。
- (3) 面足・倭根尊の二柱とは大山積皇大神としている。
伝承が記す面足・倭根尊、大山積皇大神、大己貴神について『古事記』（以下『記』と略す）および『日本書紀』（以下『紀』と略す）から検証すると

① 面足・倭根尊

- ・『記』天神第六代、それぞれが獨り神
- ・『紀一神代上第一段一書第六』天神第六代
- ・『紀一神代上第三段一書第一』天神第三代

② 大山積皇大神

- ・『記』
イザナギとイザナミの御子で大山津見の神、妻は鹿屋野比売神、亦の名を野椎の神。
- ・『紀一神代上第五段一書第七』
イザナギが劍でカグツチを三段に斬ったところ大山祇神が生まれる。
- ・『紀一神代上第五段一書第八』
イザナギが劍でカグツチを五段に斬ったところ大山祇神が生まれる。

③ 大己貴神

- ・『記』
スサノオ六世の孫大国主神、亦の名を大穴牟遲神、芦原色許男命・八千矛神・宇都志国玉神。
- ・『紀一神代上第八段本文』
スサノオと妃奇稲田姫との間に大己貴神が生まれる。
- ・『紀一神代上第八段一書第一』
スサノオ五世の孫大国主神
- ・『紀一神代上第八段一書第二』
スサノオ六世の孫大己貴神
- ・『紀一神代上第八段一書第六』
大己貴神、亦の名に大國主神・大物主神・國作大己貴神・芦原醜男・八千矛神・大國玉神・顕國玉神。
(煩雑を避けるため、以下大己貴神と記す。)

以上の系譜からは、面足尊・倭根尊・大山積皇大神・大己貴神のそれぞれの関係は不明である。大山津見の神は「海の神」、大山祇神は「山の神」とするのが一般的な理解だが、ご神格は相違するものの大山祇神社は「山の神と海の神」を習合する神社であり、本稿では大山津見の神と大山祇神は同一神であるとの認識に立ち、論を進めたい。

大己貴神の時制について『記紀』は錯綜しているが、時制の鍵となるのが「国譲り」の場面である。

『記紀』ともに、天照大神が大己貴神に「国譲り」を迫り、加えてスサノオは天照大神の弟とする系譜より、天照大神・スサノオ・大己貴神の三神がほぼ同時代の神であることがうかがわれる。スサノオの娘スセリ姫が大己貴神の妃であることから大己貴神は天照大神やスサノオよりも年少の神であることがうかがわれる。

『御鎮座本縁』は面足尊・倭根尊を大山積皇大神としているが、面足尊・倭根尊はその

名からも一対の神ではなく、それぞれ独立神と考えられる。

『記紀』ともに、孝霊天皇の御代に国家が動揺する反乱事件記事は見当たらない。

第二代綏靖天皇から第八代孝元天皇までに起こった主要な事件は、「神武天皇の後継を巡り、長兄タギシミミ命が弟のカヌマミミ命（後の綏靖天皇）に弑逆された。」と伝えられている。しかし、事件の本質は「目下のものが目上のものを殺す意を表すのが弑逆」であり、国家が動揺する事件ではない。

では、『記紀』が記さない国家が動揺する反乱事件とはどのようなものであったのであろうか。同史料は、宝歴四年（1754年）太祝越智安屋が執筆し、原典は三島神社に伝わる『白杵三島神社記録』とされるが、真偽は不明である。白杵三島神社は天応元年（781年）に大三島より勧請されたとする由緒を持つ。越智安屋は、編集姿勢について自らの考えに基づいたことを記している。

2. 『社記』（132頁）

「孝霊天皇御宇。天地不_レ和。寒暑失_レ時。五穀不_レ熟、万民愁苦。是以天皇齋戒沐浴、敬祭_二天神地祇_一、祈_二五穀豊穰_一焉。或夜天皇夢有_二一神人_一。訓_レ之曰、天皇若憂_二國之不治_一者、宜_レ敬_二祭面足尊・倭根尊・大山祇神_一。必當_二五穀成就_一。答曰、我是地神大己貴神也。於_レ天皇隨_二夢訓_一、祭_一面足・倭根尊大山祇神於大殿之内。是以風雨順、百穀成、天下平矣。是即當社神徳之初現也。」

（『大山祇神社史料（縁起・由緒篇）』）

要旨は『御鎮座本縁』とほぼ同じ内容だが、相違するところは以下の二点である。

- (1) 「天照大神」に代えて「大山祇神」を祀る。
- (2) 「面足尊・倭根尊の二柱は大山積皇大神ではない。」と否定。

同書は論理的で、『御鎮座本縁』より一歩進んだ史料と評価できる。天明二年（1782年）太祝越智宿祢玉振の執筆による。

3. 『年譜考』（156頁）

「人皇第七代 孝霊天皇御宇天地_レ和、寒暑失_レ時、五穀不_レ熟万民愁苦む。是以て 天皇齋戒沐浴、敬_二祭天神地祇_一玉ふ。或夜 天皇夢に一神人有_レ之、教て曰、天皇若患_二國之不治_一者、宜_レ敬_二和足彦神・身嶋姫神・大山積神等_一、必五穀成熟して天下自平らならむ。天皇問曰、如何教は何神や。答曰、我是地神大己貴神也。於_レ是天皇和足大神・身嶋姫神・大山積神等を大和國黒田廬戸宮ニて祭り玉ふ。自_レ是風雨順_レ時、百穀生熟して天下平安なり。如_レ是即当社神徳の現れましし初なり。」

（『大山祇神社史料（縁起・由緒篇）』）

同書は上記二史料を底本としているものの、大きな相違は「面足尊・倭根尊」に代えて「和足彦神・身嶋姫神」とする点にある。

この聞きなれない「和足彦神・身嶋姫神」に関する史料が以下の二書である。

(1) 『新日本紀』所引の「伊豫国風土記逸文」

「宇知郡（越智郡の誤記か）御嶋、座す神の御名は大山積の神、一名は“和太志の大神”也。この神は難波の高津の宮の御宇しめしし天皇（仁徳天皇）の御代に顕れましき。此神百済の国より渡り来して、津の国の御嶋（現大阪府高槻市）に座しき。云々。御嶋と謂ふは津の国の御嶋の名也。」

(2) 『伊豫旧記編 神祇部』に収められた「大日本南海道伊豫国古神社祭録」（明応三年 [1494年] 藤原隆量編纂）

「陽神和太志尊・陰神鹿屋野比賣尊」とある。

この両史料から得られる帰結は、以下のとおりである。

- ① 面足尊は“和太志の大神”、“和足彦神”、“陽神和太志尊”とも呼ばれ、倭根尊は、“陰神鹿屋野比賣尊”と呼ばれた。
- ② 和太志尊の「和太志」とは「渡し」の意で、百濟（正確には金海伽耶）からの渡来神と考えられる。同様に和足彦神の「和足」とは「渡り」の意である。したがって、和足彦神と和太志尊は同一神である可能性が高い。
- ③ 身嶋姫神は陰神鹿屋野比賣尊と同一神である可能性が高い。

同書の執筆者は不明で、明治四年ごろの成立とされている。

以上、三史料の出典は『大山祇神社史料（縁起・由緒篇）』（國学院大學日本文化研究所編集、平成12年発行）による。

4. 『伊予三島縁起』（『続群書類従 第三輯下神祇部』595～596頁）

「三國佛神無非彼孫 天神第六代面足尊・倭根尊末孫代々異國敵誅伐目録 端政二歴庚戌自天雨降給あまくだり。八代孝元天皇位。此御代東海道発立。從異國責日本。代々面足尊依末孫御合力給也。伊勢天照大神宮御祖父也。人王九代開化天皇位。同四十八年從異國朝渡。同朝敵亡。十代崇神天王位。山陽道初立。國々社初。此代熊野宮天降給云。面足尊御子也。熊野兩所權現云。春日月號兩所權現。西御前伊弉諾。中御前伊弉冉尊也。是兩所天照大御神御父母也。（後略）」

同史料は日本語漢文であるものの、内容の難解さ故か、一般的には知名度の低い史料である。難解部分に絞って、逐条的に解説を試みると

- (1) 「端政二歴庚戌自天雨降給 八代孝元天皇位。」の「端政」年号は、『二中歴』・『海東諸国記』・『襲国偽僭考』等に記録されている「古代逸年号」である。故古田武彦氏が『失われた九州王朝』（ミネルヴァ書房、2010年）で主張された「九州年号」の一つで、同年は「崇峻天皇三年（西暦590年）」に相当するようである。「雨降」は「あまくだり」の読みが付されている。神社の縁起類にはしばしばみられる用例である。
- (2) 八代孝元天皇の御代に「東海道」が整備された。この東海道が何処を起点・終点としているかは不明である。
- (3) 面足尊は伊勢天照大神宮の祖父と記しているが、『記紀』にはそのような系譜は記されていない。
- (4) 九代開化天皇は異国に渡り、敵を滅ぼしたとあるが『記紀』にはそのような記述はなく、「神功皇后による三韓征伐」記事のみである。
- (5) 十代崇神天皇の御代に山陽道が整備され、初めて社が造営された。おそらく、この「山陽道」の起点は現在の下関市周辺、終点は古代の吉備国周辺を指すものと考えられる。
- (6) 面足尊の御子が熊野宮に天下りされたとあるが、御子の名は不明である。
- (7) 「春日月號兩所權現西御前伊弉諾。中御前伊弉冉尊也。是兩所天照大御神御父母也。」
「春日月」は管見に見えないが、「兩所權現」は、「熊野那智大社・熊野速玉大社」を指すと考えられる。この兩大社の主祭神は西御前に祀られ、熊野那智大社は「熊野夫須美神」、熊野速玉大社は「熊野速玉神」を祀っている。前者をイザナミ、後者をイザナギとし、熊野本宮大社の主祭神は「家都美御子神」でスサノオに比定されている。

故百嶋氏は「熊野夫須美神はイザナミ」、「熊野速玉神は大幡主」、「家都美御子神はイワナガ姫」と指摘されている。

『熊野権現垂迹縁起』によると次のとおりである。

「唐の天台山の王子信（王子晋、天台山の地主神）が、日本の鎮西の日子の山峯（英彦山）に天降り、その後伊予国の石鎚の峯（石鎚山）・淡路国の遊鶴羽の峰（諭鶴羽山）を経て紀伊国牟婁に渡られ、熊野新宮の南の神蔵の峯に天降られた。その後、新宮の東の阿須加の社の北、石淵の谷に勧請し奉った。初めは結玉家津美御子と申した。二字の社であった。それから 13 年が過ぎ、壬午の年、本宮大湯原（大齋原）の一位木の三本の梢に三枚の月形に天降られた。（後略）」

この三枚の月形とは、「三日月」を指すと考えられ、弓弦の両端は両所権現となる。すなわち、「春日月」とは「三日月」を比喩的に表現したと考えられる。

5. 「神々の系図」

上記史料の疑問を解明する手掛かりとして、同系図を検証する。

(1) 面足尊

面足尊は初期九州王朝親衛隊長で鉾山の神金鑽大神こと瀛氏^{注1}の総大将金山彦。最初の妻は大山祇神の姉大市の姫、御子には神武天皇の後アイラツ姫（『記』の阿比良比売、『紀』では吾平津媛）、二番目の妻は草野姫（亦の名埴安姫）、御子には櫛稻田媛（瀬織津姫）がある。

(2) 倭根尊

倭根尊は、父白族の王「奴国王白川伯王」^{注2}、姉[㊦]玉依姫は神武天皇の母、兄大幡主、大山祇神の後。

(3) 大山祇神

亦の名を月読命、越智族^{注3}の祖。父は金海伽耶の総大将金越智。日本名はウマシアシカビヒコチ（『記』は天神四代宇摩志阿斯訶備比古遲の神、『紀』神代上第一段一書第一では、天神初代可美葦牙彦舅尊と表記）、母は天之御中主（亦の名を白山姫・『記』が記す菊理姫・国常立尊）。姉に大市の姫。妻草野姫との間に神大市の姫（亦の名を罔象女、『記』は大山祇神の御子とある）、大己貴神（大出世した時の名は大国主）、木花サクヤ姫（『記』は木花佐久夜毘売、『紀』では木花開耶姫と表記、瓊瓊杵尊の妃）がある。

(4) 大己貴神

初代九州王朝親衛隊長金山彦の後継者で、中期九州王朝親衛隊長、父は大山祇神、母は草野姫。最初の妻はスセリ姫、亦の名を瀛津島姫、市杵島姫（『記』は須勢理毘売命、須世理毘売命と表記）、御子に下照姫、二番目の妻は豊玉彦の娘豊玉姫。大出世を遂げた後の称え名が大国主命と指摘されている。

以上のデータから、以下の帰結が得られる。

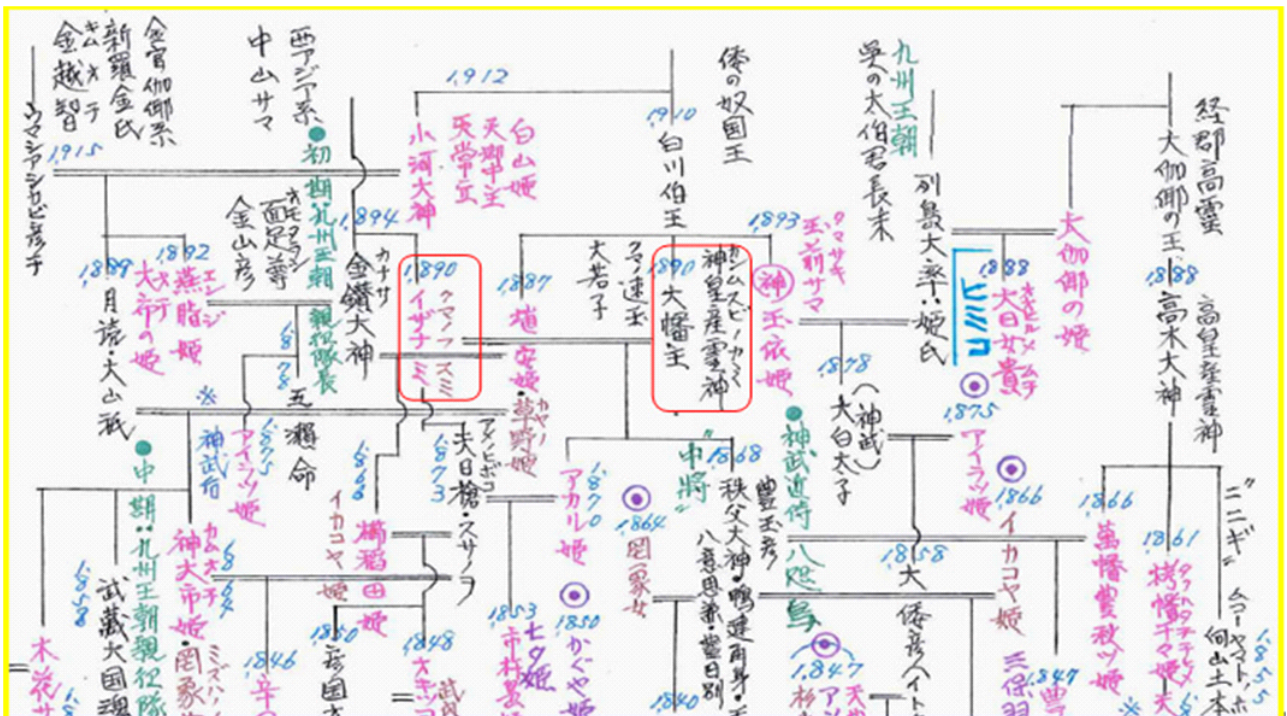
- ・面足尊は初期九州王朝の親衛隊長金山彦。卑弥呼とほぼ同世代で、二番目の妻草野姫（亦の名埴安姫）と共に 2 世紀半ばごろまでに鉾山資源を求めて伊予へ進出したと考えられる。
- ・倭根命は大己貴神の母、草野姫。
- ・初期九州王朝親衛隊長金山彦の後継者が大己貴神。
- ・陽神和太志尊は大山祇神。金海伽耶の王金越智（日本名はウマシアシカビヒコチ）と共に日本列島に渡った渡来神。卑弥呼とほぼ同世代で、主人筋である最初の妻草野姫に従い、伊予へ進出したと考えられる。

・陰神鹿屋野比賣は草野姫。

なお、『伊予三島縁起』に「十代崇神天皇の御代に、熊野宮に天降りされたのが面足尊の御子」と記されているが、「神々の系図」を検証すると「面足尊の後継者大己貴神」と考えられる。

大山祇神社の最も古い神事に「毎年1月7日に行われる生土祭」がある。同神事は「安神山」の赤土拝戴神事を斎行し、「御串山」の榊枝と共に迎えする神事で、神前に清められた赤土を献供し、宮司以下全員が額に赤土の神印を拝戴し、続いて串木を持ち、素朴な樂を鼓に和して奏する神事が伝えられている。「生土祭」の根幹をなすのが「赤土すなわち埴」であり、「草野姫、亦の名埴安姫」が同祭の信仰対象であったと考えられる。

表1 百嶋由一郎「神々の系図」極秘



注1 瀛氏 (中国→濟州島→日本列島)

イスラエル系黎族の大将金山彦の中国時代の姓「瀛」を名乗る氏族。モーゼ（紀元前16世紀または13世紀頃に活躍したとされる）を支えたヤコブには12人の子があり、後にイスラエル12部族と呼ばれたが、その一族もエジプトを追われ四散した。その後、ペルシャに移住後はインドのガンジス川中流、現代の都市名で言えばヴァーラーナシー（ヒンドゥー教・仏教の七として重要な都市）に紀元前10世紀頃に定住し、**波羅奈国**（カーシー国とも呼ばれる）を建国した。然し、紀元前4世紀頃にアレキサンダー大王に追われ、中国へのがれ、姓を「瀛」に改めた。しかし、漢民族との対抗に敗れ、濟州島を経由して紀元前後に日本列島へ移住した。瀛氏の統領金山彦は「波羅奈国」王の系譜につながる。

「波羅奈国」の痕跡を示すのが群馬県高崎市の榛名山である。榛名神社の祭神は火産靈神と埴山姫神が祀られている。火産靈神は金山彦のまたの名であり、埴山姫神は埴安姫こと草野姫で金山彦の妃でもあった。

瀛氏の統領である金山彦は鉱山開発並びに製鉄・鍛冶技術に優れ、多くの鉱山を開発し、中でも阿蘇黄土と呼ばれる褐鉄鉱を焼成し、ベンガラの生産や山砂鉄を原材料に農業製品や武具を生産した。特に威力を発揮したのは鉄製武器の供給で、その武力を背景に神武・

卑弥呼政権を支え、死後は「金讃大神」として崇められ、その末裔は後に「蘇我氏」に名を改めた。

金山彦の先祖は紀元前に九州南部に渡来したと故百嶋氏は述べられている。金山彦は、阿多（大隅半島）を根拠地に将兵を養い、その後は糸島の曾根丘陵に進出し、伊都国王兼第一次九州王朝の親衛隊長として四方ににらみを利かせ、時には狗奴国や熊襲連合軍と干戈を交えた。将兵や家臣に多くのヘブライ人（紀元前4世紀頃、ヘブライ人はアレキサンダー大王に追われ、イラク・イラン・中国・朝鮮半島を経由後、日本に移住し、後に「秦氏」に名を改めた。）を抱えていた。

徐福伝説で名高い徐福の姓「徐」は、『元和姓纂（当の元和七年（812年）林宝によって編纂された姓氏辞典）』によると徐は「瀛姓」、伯益（堯・舜・禹の三代に仕えた賢臣）の裔」とある。司馬遷の『史記』巻百十八「淮南衡山列伝」によると、秦の始皇帝（在位紀元前246～221年）の命を受け、徐福は不老不死の薬を求めて東方に船出し「平原広沢」を得て、王となり戻らなかったとの記述がある。「瀛州」は後に日本を指す名となった。

注2 白族（雲南省→海南島→琉球列島→九州）

モーゼ以前のヘブライ人で、イラン・インドを経て中国に渡り、紀元前3世紀頃に雲南省昆明の滇池の畔で滇王国を築いた。その後、漢民族に圧迫され、雲南省麗江からメコン川を下り、サイゴンを北上し海南島の南西部に定住後、黎族とも呼ばれた。黎族の一派である白族は王が一族を率いて紀元前1～2世紀頃に各々熊本と阿蘇に渡った。白族の王は代々、白川伯王を名乗り、「奴の国王」「刺国大神（太政大臣）」とも呼ばれ、後継者となった大幡主は博多の櫛田神社の主祭神として祀られている。

大幡主は『後漢書』東夷伝が記す「奴の国王」であったが、「君長大率姫氏の後継者神武天皇」に日本列島を代表する坐を譲る。

注3 越智族（朝鮮半島→壱岐→九州）

朝鮮半島の南部から中部にかけてあった金海伽耶国（学術用語は金官伽耶国）を支配していたアリア系（月氏）匈奴の一族で伽耶発祥の地である現在の金海市付近に移住していた。金智を祖とする金首露は民族の製鉄技術の伝承者で、その技術を得るため高句麗・百濟・倭国から引っ張りだこで、その技術は狗邪韓国経由で倭国にも伝えられた。

金首露の嫡子金海伽耶の王金越智（日本名ウマシアシカビヒコチ）は、後の天之御中主と共に倭国に渡り、その跡を継いだのが許氏の高木大神と故百嶋氏は述べられている。

『記』は、天地開闢の神を天の御中主の神、宇尼摩志阿斯訶備比古遲の神で五柱の別天つ神と記し、『紀一神代上』本文では、天地開闢の時、葦牙（あしかび）から化生した神、國常立神、一書第三では、天地開闢の神、可美葦牙舅尊と記されているが、天御中主は記されていない。『記紀』編纂者は両神が始祖神であったと認識されていたようである。

ウマシアシカビヒコチ・天之御中主の両神は、九州王朝のために教宣活動による融和政策を推し進め、全国各地へと移動した。その足跡が全国の水天宮、白山神社に残されている。ところが、天之御中主またの名白山比咩・菊理媛は祀られているものの、夫のウマシアシカビヒコチを祀る神社は極めて少なく、管見では、出雲大社本殿内北面に御客座五神の一神として、また東温市牛湫の浮嶋神社うましあしかびひこちに可美葦牙彦舅尊が祀られている。

この理由について、故百嶋氏は、源実朝によって朝鮮人（本当はトルコ系匈奴）の神と誤解され、神名を削られてしまったと述べられている。それ以前は夫婦揃って祀られていたようである。群馬県前橋市の赤城神社では、名を秘され「赤城大明神」として祀られている。

この偉大な神々の嫡子ツキヨミの命またの名大山祇神は、武力を背景とした神で、両親

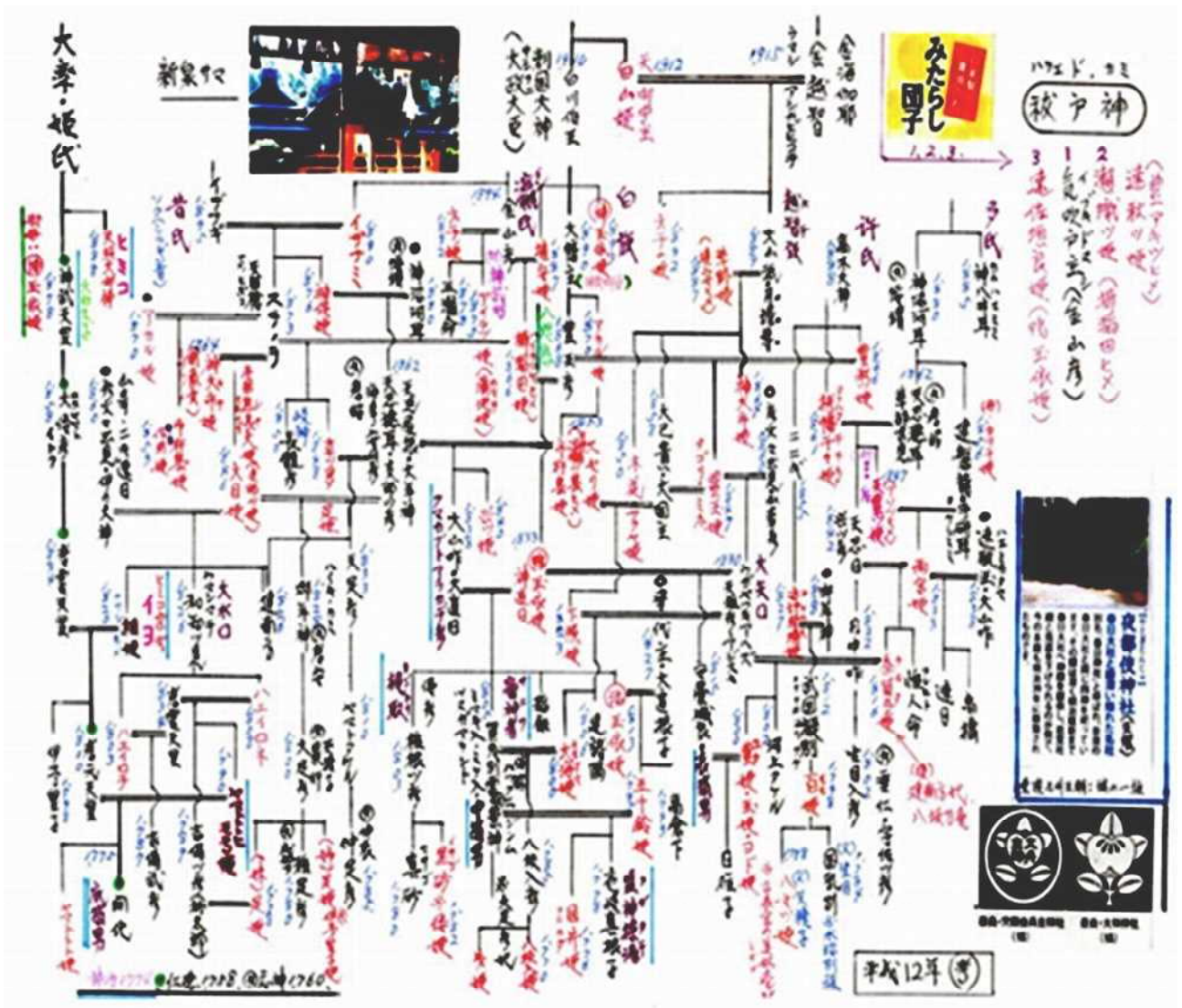
より早く倭国に渡り、圧倒的な武力で阿蘇周辺から鹿児島・宮崎県まで勢力を広げていった。『魏志』倭人伝が記す狗奴国の首長卑彌弓呼とは大山祇神であると、故百嶋氏は述べられている。

1954年に山西省で発見された大唐故金氏夫人墓銘や武王陵碑や新羅の各種金石文などでは、**新羅の金氏王族は匈奴から渡来**してきたと記録されている。韓国の考古学会も同様な見解を示しており、故百嶋氏の見解が実証されている。

壱岐島の月読神社には、馬上にまたがり、太刀を佩いた月読命の絵が奉納されている。また、『皇太神宮儀式帳』に「月讀命。御形ハ馬ニ乗ル男ノ形。紫ノ御衣ヲ着、金作ノ太刀ヲ佩キタマフ」とあり、**馬上の姿は匈奴**を彷彿とさせる。

ツキヨミの命は、福岡県朝倉市把木町周辺を根拠地にし、九州南部で金山彦と激しい対立抗争を繰り広げていた。所謂百年戦争である。彼らの戦いの原因は奈辺にあったのであろうか。彼ら部族の特性である「鉄資源の開発」を巡って、中部九州・南九州の山々で互いに鉄資源の利権確保のために激突したと推測される。大山祇が「山の神」といわれる由縁でもある。戦いは一進一退が続いたが、最終的には金山彦側の優勢に推移し、スサノオや父のウマシアシカビヒコチの調停により戦いは終結した。

表2 「神々の系図－平成12年考」



このはなさくやひめ その2

名古屋市 石田泉城

その1において、私は「伊都能知和岐知和岐弓」のイトノチワキチワキテは、「伊都の地開き、地開きて」とし、「伊都」を地名として読み、天降りしたクシフルダケに行く途中の経過地を伊都であると特定しました。さらに続く「於天浮橋、宇岐士摩理蘇理多多斯弓」のウキジマリソリタタシテは、「泥締り反り正して」と読み、これまで誰も発想されなかった天浮橋を使った道路などの造成として、沼地を締めて窪地を整えと読みました。古代の糸島は一部には島状に分離しその間は沼のような状態があったと思われ、それを整地したとすれば的確な表現であり、このように『古事記』の記事を理解すれば、通説では理解困難で疑問であったところが氷解します。

『古事記』では、ニニギがサクヤヒメと出逢う具体的な場所が示されています。それは、これまで何度も出てきた、あの「笠紗御前」（かささのみさき）です。

於是、天津日高日子番能邇邇藝能命、於笠紗御前、遇麗美人。爾問「誰女。」答白之「大山津見神之女、名神阿多都比賣。【此神名以音。】亦名謂木花之佐久夜毘賣。【此五字以音。】」

是に、天津日高日子番能邇邇芸能命は、笠紗の御前にて、麗美人に遇う。爾(かれ)問うて「誰の女か」、答へて白す。「大山津見神の娘、名は神阿多都比売【此の神の名、音を以ちてす。】亦の名は木花之佐久夜毘売【此の五字音を以ちいる。】と謂う。」と。

ニニギとサクヤヒメは、「笠紗御前」で出逢います。「紗」は「沙」や「砂」の異体字です。『日本書紀』では「笠紗」は「笠沙」とあり「沙」は砂のことで、また「御前」は岬でしょうから、「笠紗御前」は、「笠」に関わる砂浜を表しています。

「笠紗御前」に関わる場所は、南九州説では、鹿児島県南さつま市笠沙町の地名がありますが、これは神話にちなんで大正十一年（1922年）に西加世田村を改め「笠沙村」と称し、その後1940年に笠沙町となった、後代に作られた地名であって、古くから存在した地名ではありません。

また、天孫降臨の重要な地名「日向」に関して、「日向国」とする考えがありますが、「日向国」は律令制の成立に伴って成立したもので、その時期は7世紀中期以降です。神話では「熊曾国」です。つまり、「日向国」は新しい地名であり、これを神話の「日向」の根拠にするのは無理があります。宮崎には『日本書紀』の記事にそった伝承地があまりにも揃いすぎていますが、韓国に向かうことのない「日向国」では、神話の「日向」ではなりえず、伝承地は後代に創作された疑いが強いように思われます。

イザナギの「筑紫日向小戸」（原文：筑紫日向之橋小門之阿波岐原）がどこに位置するかについて、「日向国」の日向國橋之小戸神社は先の理由から該当しません。

これに対して糸島市に隣接した福岡市西区には「小戸」があります。

「筑紫日向小戸」の「筑紫」は北部九州で、「日向」は糸島市と福岡市の境の日向峠などに地名が残っています。糸島市と福岡市の境を源流とする日向川（室見川）の河口には、小戸（小戸大神宮、福岡市西区小戸2-6-1や小戸公園）の地名が現存し、ぴったり記紀の地名に符合します。つまり、この小戸は、「筑紫」の「日向」の「小戸」ですから、この「日向」は糸島の「日向」です。

ニニギの墓は「筑紫日向可愛【此云埃】之山陵」にあると書記に記され、やはり「筑紫」の「日向」であり、この「日向」は北部九州です。

そもそも『魏志』倭人伝の記述にあるように、代々王が居たのは伊都國ですから、この記事に従えば、糸島の「日向」に、ニニギを始め彦火火出見尊や彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊の埋葬地があると考えるのが自然です。

一方、「笠紗御前」に関わる具体的な場所について、北部九州説では、古田武彦説があり、「笠紗」を『和名類聚抄』の御笠郡御笠郷(福岡県)とし、その岬を御笠川の博多湾河口付近とします。地名に基づく有力な説であろうと思います。ただ、御笠川の河口は博多湾岸の東の方に位置し、博多湾岸の西方の天孫降臨のクシフル山から随分と離れており、また御笠郡は内陸部にあり岬とは関連性の点でやや弱いと思います。

私は、「笠紗」をクシフル山の近く、糸島半島にあると考えています。

糸島半島の付根、クシフル山の麓に位置する福岡市西区女原(旧・福岡市西区女原字笠掛)には、女原笠掛遺跡、笠掛池など「笠掛」の地名があります。この福岡市西区今宿や周船寺のあたりは昭和16年に合併されるまでは糸島郡でした。また、糸島市東には小字名として東笠掛や西笠掛の「笠掛」の地名があります。つまり糸島半島の付け根あたりの西の方(糸島市東)にも東の方(福岡市西区)にも「笠掛」の地名があります。この笠掛の地名が残るところはいわゆるかつての糸島水道に位置します。糸島は古くは糸島水道で怡土と志摩の二つにおおむね陸地が分離されており、糸島水道を境にして半島の志摩を笠に見立てたのではないかと思います。

(なお、鹿児島県薩摩川内市大字里町里の小字名にも西笠掛、東笠掛の地名がありますが、それは海の中の離島である上かみこしき 甑島の地名であり鹿児島説の根拠としては該当しないでしょう。)



ところで、「笠」姓は、日本全国で福岡県に集中している姓であり、『日本姓氏語源辞典』(宮本洋一著、示現舎、1980年)によれば、その分布は久留米市(約800人)が最多で、次に糸島半島で糸島市(約200人)、福岡市西区(約130人)を合わせて約330人と多く、その他福岡市の城南区、早良区、南区に合計約220人がいるとされます。

同辞典では、「笠姓」について、「②衣笠の略。」のほか「①岡山県笠岡市発祥。飛鳥時代に「笠(カサ)」と呼称した地名。同地付近を弥生時代末期・古墳時代初期頃に統治した笠臣国造(カサノオミノミヤツコ)の後裔と伝える。」とあります。

この岡山の笠岡の地名由来には諸説あって、神功皇后お立寄りの伝説がある笠目山(応神山)に由来する説、備中国で勢力をもった豪族の笠臣氏に由来する説、また、応神山の山麓に笠神社が鎮座していることに由来する説があります。いずれにしても、かさ氏の由来については比較的新しいといえます。

また、「名字由来ネット」には、笠(りゅう)姓が北九州地方の出自で、笠(かさ)姓は『日本姓氏語源辞典』と同様に岡山地方の出自であるとします。笠姓は中国大陸や朝鮮

半島にはほとんど無いので日本独自の姓であるようです。同ネットでは、北九州独自の笠姓がいつ頃の時代からあるのか明確な根拠が示されていませんが、笠姓が糸島半島に現在も多いのは、「笠」が糸島半島を表す地名であった可能性を示唆します。

糸島で象徴的な山、可也山の地名はよく伽耶由来と言われますが、韓国の伽耶山は標高1,000m級の山並であり最高峰は1433mです。しかも海岸から100kmの内陸部にあり、可也山が伽耶山から名付けられたとすると規模も形態もマッチせず違和感があります。真鍋大覚（航空工学者、暦法家、1923～1991年）は、糸島は製鉄の地で可也や芥屋は鋳物の本体の表面に固着した鋳滓の「けら」が転じたとします。糸島は鉄の産地ではあるものの、可也山から鉄滓が出土していないのでその説も疑問符が付きます。

可也山は筑紫富士や糸島富士と呼ばれ円錐形の美しい山で、まさに笠のようになだらかな形です。糸島水道から分離された志摩が笠と呼ばれていたとすれば、可也山の地名由来は笠ではないかと思えます。

ニニギとサクヤヒメに関わる神社は糸島に集中しています。

クシフル山や高祖山の麓に位置する笠掛のすぐ西1kmには伊観神社（いとじんじゃ、福岡市西区周船寺）があり、創建年代は不詳であるものの、江戸時代に伊観県主を合祀するまでは、瓊々杵尊と妻の木花開耶姫命の二柱のみが祀られていたとされます。ニニギとサクヤヒメの二柱のみを祀る神社は、全国で、この伊観神社と、宮崎県宮崎市にある木花神社のみです。ただ、宮崎の木花神社の社名の読みは、「このはな」ではなく「きばな」と読むところにやや難があります。ニニギとサクヤヒメの二柱のみを祀る神社が糸島にあるところを重視したいと思います。ニニギとサクヤヒメを祀るこの伊観神社のある糸島は、まさにニニギとサクヤヒメが出逢ったところとして相応しいです。

また、その南数kmには、細石神社（糸島市三雲432）があり、その祭神は由緒書きに「磐長姫と妹の木花開耶姫（日向第一代ニニギノミコトの妃）の二柱」とあります。現在は小さな神社ですが、天正15年に豊臣秀吉によって神田が没収されるまでは現在より大きな規模であったと考えられます。磐長姫とサクヤヒメを祀る神社は、全国で唯一であろうと思いますから、この点でも、糸島がサクヤヒメとの関連が深いです。



さらに、糸島半島の西端には、**鹽土神社**（塩土神社）があります。鹽の新字体が塩です。

全国に塩竈神社は多数あり、塩土老翁(シオツチノオジ)を祀る神社も数十社ありますが、塩土神社と称する神社はこの糸島の神社が日本で唯一です。

『日本書紀』一書には、事勝國勝神は、またの名を塩土老翁であると記されています。

塩土神社の御祭神について、『糸島郡誌』では塩土老翁神とし『福岡県神社誌』では、「鹽土老翁、大山咋命」とあります。塩土老翁は事勝國勝神ですから、この塩土神社は、事勝國勝神を特定する重要な神社です。

したがって、この糸島半島の最西端に位置する塩土神社が、事勝國勝長狭の居所でしょう。ニニギが降臨した時に、最初の土地を献上したのが塩土老翁すなわち事勝國勝長狭であり、ニニギはここを拠点として糸島平野を手中にしていたということです。ニニギは糸島半島の最西橋の砂浜「笠紗御前」で事勝國勝長狭に会ったということになります。

このように、サクヤヒメを特定する伊観神社、細石神社、塩土神社は、糸島に集中しています。「笠」が糸島半島を指す地名とすれば、「紗」は砂ですから「笠紗御前」は、笠である糸島半島の砂浜の岬を指していると思われます。

そして糸島で美しい砂浜と言え、国定公園に指定されている「弊の浜」(幣の松原)でしょう。その1で示したとおりニニギが上陸した場所でもあります。

したがって、韓国に向かい、「笠紫」の「日向」の高千穂のクシフルタケを求める途中で通ってきた「笠紗御前」、そして、ニニギとサクヤヒメが出逢った「笠紗御前」は、糸島半島の「弊の浜」(幣の松原)が妥当であると考えます。

【重要】会報誌の送付について(再掲)

2019年8月まで会報誌は発行時に毎月送付してきましたが、郵送料削減のため9月号は10月号発送に同封し9月末頃に送付することと致しましたのでご了知いただきますよう何卒よろしくお願い致します。

今後は同様にして、11月号と12月号は12月号発行の際に同封して送付します。ご迷惑をおかけしますが今後とも会の運営にご理解、ご協力くださるようお願い致します。

前回の例会の内容

■ このはなさくやひめ その1 名古屋市 石田泉城

瓊瓊杵尊に関わる記紀の記事に関して、「伊都能知和岐知和岐弓」や「宇岐土摩理蘇理多多斯弓」「真來通」など通説では疑義のある記事の解釈や「笠紗」「岐志」「幣」などの地名比定について自説を示した。

■ 弥生末期の美濃の集落とヤマト 一宮市 畑田寿一

弥生末期の天候不順により尾張平野の弥生集落は住むのに適さなくなり美濃の高台の船来山遺跡などに集約化された。纏向遺跡の出現も同様の要因と考える。

■ 「倭国乱」の社会・経済史的意義 東海市 大島秀雄

国立歴史民族博物館編集の『倭国乱る』の資料を配付し、倭国乱の中における尾張の位置づけを紹介した。

例会の予定

■ 例会の予定

- 1 日時 10月13日(日)13:30~(第4)
- 2 場所 名古屋市市政資料館
名古屋市東区白壁1-3、TEL052-953-0051
- 3 参加料 500円 (会員は不要)
- 4 交通機関
(1) 地下鉄名城線「市役所」、東徒歩8分
(2) 名鉄瀬戸線「東大手」、南徒歩5分
(3) 市バス「市政資料館南」、北徒歩5分
(4) 市バス「清水口」、南西徒歩8分
(5) 市バス「市役所」、東徒歩8分
- 5 駐車場 市政資料館：12台+α収容(無料)

■ 来月の例会

11月の例会は東京八王子の大学セミナーハウスで開催の「古代史セミナー2019」に代える。

会員の投稿について

■ 会報誌への投稿(編集担当：石田) furutashigaku_tokai@yahoo.co.jp

■ 投稿締切り日 10月27日(日)

古田武彦先生とその学問に興味のある方ならどなたの参加も歓迎します。また参加に際し事前連絡不要、遅刻・早退もかまいません。例会で発表する場合には資料を25部用意ください。
